

# 新人保育者に期待される素養について

池田 仁人

金元 あゆみ

## I はじめに

### 1. 新人保育者に求められる資質 能力とは

幼稚園教諭、保育士など、就学前の子どもたちに接する専門職の業務は多岐に及び、その遂行に求められる能力や資質についてもまた同様に様々なことを求められる。たとえば、ピアノなど楽器演奏の能力や、運動能力など、単純にその力が高ければよい保育者というのではなく、保育計画を立てる力も求められ、その場でそれらの能力を生かしていく必要もあるだろう。さらに、子どもを見取る力、コミュニケーション力、同僚性など、枚挙に暇がない。では、子どもたちに接する職に就くに当たり、最低限求められる事柄は何であろうか。

例として八田による保育者に求められる事柄をまとめると以下のようになる。

- ・ 子どもを第一に考えることができる。子どもにとって最善の保育は何か考えられる。
- ・ 自園の保育目標を熟知して保育活動ができる。
- ・ 親の立場を考えて判断できる。どの保護者に対しても平等に接する事ができる。
- ・ 一流の社会人として生活することを心がける事ができる。時間を守り、返事や電話の応対も正しくできる。
- ・ 挨拶、整理整頓ができる。身だしなみがきちんとしている。清掃の基本が身についている。
- ・ 同僚とともに成長できる。良い点も悪い点も直接指摘しあえる。
- ・ 指示されたことは実行し、結果は必ず報告することができる。

子どもを第一に考えること、協調性・同僚性などが必要とされるのは想像に難くない。しかし、「社会人」として正しく過ごすことも重要なファクターであると考えているようである。これに関連し、板東らは、新人保育者に求められる社会人としての素養の一部を「マナー」として以下のようなことを挙げている。

- ・ 笑顔。子どもも保育者が笑顔でなければ不安を感じる。挨拶。
- ・ 身だしなみが整っている。清潔感のある服装をしている。
- ・ 正しい日本語で、通る声、聞き取りやすい声で話せる。特に敬語が正しく使える。
- ・ 子どもの見本になるような動作立ち振る舞いができる。

4月にスタートした時点で何の経験が無くとも「先生」と呼ばれる立場になる。自分はまだ「先生」であり、いつでもそのように見られていると考え、初めから他者の目を絶えず意識して自らの行動を律することが出来るということは重要な事柄であると思われる。

板東らもチームワーク・協調性や、指示をきちんと聞いて行動することが重要であるとしているが、自分から進んで声をかけて働く、先輩のいい例はどんどんまねようとしたりするなどある程度の積極性にも触れている。しかし、上司は責任をとれるが、自分はまだとれないのだから、むやみに個性を発揮しようと思わず、まずは指示通り、型どおりやってみる、わからないことは質問する、など同時に謙虚さも求めている。また、失敗もあるのだから、叱られるようなことがあっても卑屈な態度をとらず、素直に反省し、前向きに考えるポジティブさや、悩みを抱え込まず、相談することができる外向性も備わっていると良いとも述べている。板東らの新人保育者像で特徴的なのは、人間性・感受性を磨く為に興味を持つことや家事もできることも重視していることである。幅の広い人間となるだけでなく、その趣味や家事能力も保育に役立つときが来るかもしれないというのである。

増田は保育者の資質や姿勢について以下のように述べている。

- ・ 優しく温かなヒューマニティ。子どもを好きなだけでなく、一人の人間として尊重できる子ども

観を持つ。

- ・ 心身共に健康であること。自分の心が安定していると子どもや保護者のかすかな変化にも気づく。
- ・ バランスのとれた生活を創造する力と自己コントロール力。
- ・ 挨拶や人への心配りなど人として当たり前のことができる。
- ・ 主体性と協調性を併せ持ち、能動的に取り組む姿勢と行動力、共同して一つのことをやり遂げることができる。協力体制を構築し、お互いの技能や専門性を尊重した上で、保育の質向上のため議論ができる。
- ・ その人なりの保育観、子ども観と豊かな感性をもつ。一人一人の子どもの背景にある課題は多様で複雑であるから、常に基本に立ち返り、子どもを見る目、保育を見る目を確かなものにする。
- ・ 子どもへの驚く心を持ち続ける。子どもの小さな心の変化に気づく繊細な心をもつ。
- ・ 自然の変化に感動する心、芸術や文化に触れて感動する心をもつ。
- ・ 常に自分自身の変化に関心を持ち、生き生きとした表情や行動につなげる。
- ・ 豊かな保育技術を身につける。理論と実践を統合しながら質を高めていく。研究的に保育する課題を見つけて、掘り下げ、調べるなどを繰り返す、改善や工夫を重ねて保育の質向上を図る。

増田も豊かな人間性や感性、社会人としてのマナー、自律性、積極性や謙虚さ、趣味や保育技術等を挙げており、八田や板東らが述べていることをまとめているとも言えよう。これらは、保育者である以上、絶えず求めていかななくてはならないことだと考える。

例示してきたものに共通しているのは、まず子どもを第一に考えることができる気持ちだろう。子どもを見取る目を持ち、保育に活かすことが出来ることが求められる。そして社会人・大人として生活できていること、謙虚な姿勢で他の職員と協調し、協力体制がとれることなどが挙げられる。また、積極性や感受性など個人の人間性も重視されているようである。楽器や描画工作などの技術力は当初あまり求められず、むしろ、就職してから練り上げていくととらえられているようである。しかし、これは保育者に絶えず求められる姿であり、経験を積む中で備わっていく事柄でもある。板東らは1年目の保育者のありかたについて触れているので、新人に求められる事項としては近いものがあると考えられるが、子どもたちや保護者にとっては4月の初めから「先生」であり、そのスタート時点で備わっていないとではない資質や能力もあると思われる。保育の現場では採用に当たりその必要と思われる資質や能力をどのように見極めているのだろうか。実際に新人保育者を受け入れる側としては、新人たちの何を見ているのだろうか。就職試験を実際に行い、その後教育に当たる管理職、人事担当者の意見について、養成機関としても是非知っておかなくてはならないことだと考える。

## 2. 「個」に迫る「PAC分析」について

人の持つ意識を調査するにあたっては様々な方法が考えられるが、今回は、「個」にアプローチし、個人個人の態度やイメージの構造を分析できる「PAC (Personal Attitude Construct) 分析 (内藤 1997)」を用いる。この方法は、当該テーマに関する自由連想、連想項目間の類似度評定、類似度距離行列によるクラスター分析、被験者によるクラスター構造のイメージや解釈等を通じて行われる。「個」へのアプローチであるため、少数の被験者でも質的な調査が可能であり、かつ、ある集団に共有される態度を仮定することも出来る。内藤はこの方法を用い、ベテラン教員の学級経営態度や能力について調査し、経営改善に向けた診断的解釈にもこの方法が生か

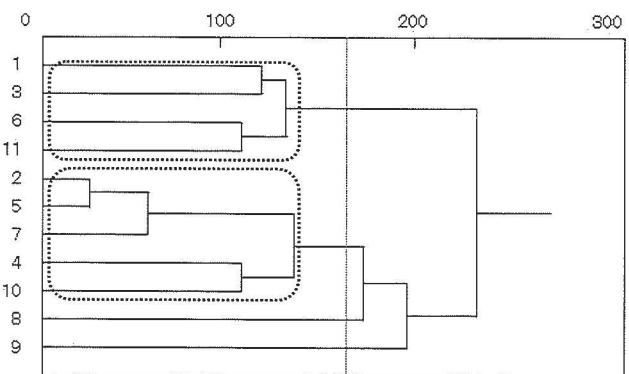


図1 デンドログラムとクラスターのイメージ

せる事を見いだした。新館ら(2011)も、中学校担任の学級作りのイメージを経験別に調査し、担任の認識を探るとともに、生徒との人間関係作りにおける改善点を見つけ出す研究を行っている。

研究の手順としては、およそ次のようになる。①刺激文(イメージを引き出す語句、文章)を被験者に与える。②被験者は刺激文を受けて連想する語句をいくつか出し、それに重要度の順位を付ける。③被験者は語句同士の類似度を直感的に判断する。全ての組み合わせで行う。④処理プログラム上で入力した後、デンドログラムを作成。⑤実験者がデンドログラムにクラスター分割の原案を書き込む(図1:手書の囲い)。⑥被験者に対して、原案を元に共通するイメージや項目が似通っている理由などについて質問する。全てのクラスタについて同様に行う。このときの発話を記録し被験者の持つイメージを引き出す。⑦クラスタ間の比較を行う。このときの発話も記録する。⑧各項目について「+」、「-」、「0(どちらとも言えない)」のどのイメージをもつかを回答させる。発話、実験者とのやりとりの中から、被験者の持つ対象へのイメージを探っていくのである。

## II 本研究の目的

保育者に求められる資質は多岐に及ぶ。しかし、その中には初めから備わっていることが難しいもの、経験を積まないと育ってこないことも含まれる。しかし、新人であれ、子どもや保護者にとっては「先生」であり、同時にその施設を運営する要員ともなる。したがって、保育者としてスタート時点で身につけていないと差し障りがある資質や能力も存在すると考えられる。特に養成校においては、まず現場でスタート時に求められる資質や能力について熟知しておかなければならないだろう。そこで、今回は「新人保育者に必要なことは」をテーマとし、大学を出たての新人の保育者に最低限求められる資質・素養・能力・態度とはどのようなものかについて、保育の現場で職員の育成にあたる立場の意見をを通して探っていく。

## III 調査

### 1. 方法

- (1) 調査対象 相模原市内幼稚園保育園管理職 40歳代男性(A園長) 30歳代男性(B副園長)
- (2) 調査時期 2012年12月と2013年1月の2回
- (3) 手続き

○第1回〔刺激文によるイメージからデンドログラム作成まで〕

- i) 一人一台PCを使用する。PAC分析を行うにあたり、刺激文として「新人保育者に必要と思われることを具体的にイメージして下さい。その際のイメージを、思い浮かんだ順に、文章や単語でコンピュータに入力して下さい。」を示す。
- ii) 被験者は直感に基づいて重要だと思われる語句を8~12個の範囲で順に入力する。その後、被験者は自分が連想した語句同士の関係性について強弱を判断し、入力行う。
- iii) 入力後、手順にしたがって処理を行い、デンドログラム(樹状図)を作成する。

○第2回〔聞き取り調査〕

- i) 被験者に対し、各項目について+、-、0のイメージを聞く。
- ii) より関係性が深いと被験者が考えた項目同士が近くに配列されているので、それらをいくつかのグループにまとめ、被験者に生成した「クラスタ」の原案を提示する。
- iii) 「第1のクラスタ」について、このようなクラスタになった理由や、項目同士がどのように関係しているのか(何が似ているか、何が関係しているか、どのような場面を思い描いたか等)を被験者に聞く。



図2 聞き取り調査のイメージ

- iv) 被験者にクラスタに名付けさせる。
- v) 第2のクラスタ以降も同様に作業を行う。
- vi) クラスタ同士の関係について聞く。(クラスタ同士の類似点, 違いなど)
- vii) 図を見渡し, 新人保育者の資質に関して全体的なイメージを聞く。

## 2. 結果と分析

被験者が関係性が近いと考える項目同士が形成するクラスタの生成に至るまでの発話から, 被験者が持つ保育者の資質として重要だと思われる事柄(能力, 態度, 知識, 心得など)を探っていく。また, 発話の中で多用されている言葉についても着目し, 個の持つイメージに迫っていく。

### (1)A 先生について

キーワードは重要度順に, 「素直さ」「真面目さ」「あきらめない気持ち」「好奇心の旺盛さ」「誰とでも関わろうとするコミュニケーション力」「自己肯定感」「病気になりにくい体力」「視野や考えの広さ」「物事を柔軟に受け止める姿勢」「ポジティブな精神力」が挙げられた。

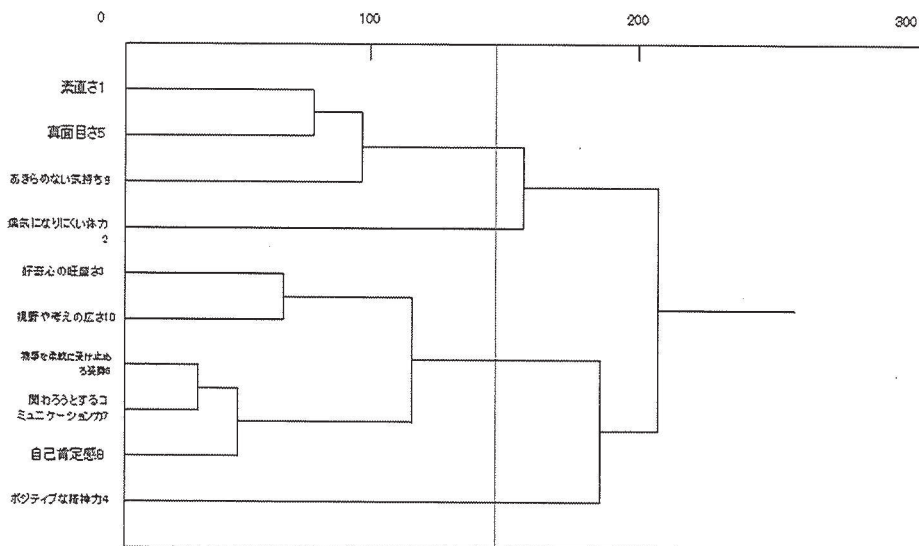


図3 A先生のデンドログラム

A先生は10の項目を挙げているが, 上位二つは「素直さ」「真面目さ」であり, A先生が, 誠実で真摯な態度を持った保育者を求めている事がうかがえる。また, 中間のキーワードが「あきらめない気持ち」「好奇心の旺盛さ」「コミュニケーション力」「自己肯定感」であること, 10位に「ポジティブな精神力」があることから, 外交的でポジティブな志向を持つことが重要であることを期待していると推察する。また, どの項目も「+」のイメージであるとし, 身についていて欲しい, という思いがあるようであるが, 唯一, 「真面目さ」だけが「0」のイメージであるとされた。このことについてA先生は「真面目であることは良い反面, 怖さがある。柔軟性に欠ける可能性がある。あと, プライドの高さとか。マイナス要因を引き寄せる可能性がある, ということですね。」と説明した。一所懸命であるという良い面を持つとともに, 度が過ぎると頑固になり, 自分も人も受け容れられなくなる, 良くない面も併せ持つ要素である為だという。

次にA先生によるクラスタ解釈について記述する。

仮のクラスタの第1は「素直さ」「真面目さ」「あきらめない気持ち」「病気になりにくい体力」で構成される。クラスタの第2は「好奇心の旺盛さ」と「視野や考えの広さ」から, 第3クラスタは「物事を柔軟に受け止める姿勢」「誰とでも関わろうとするコミュニケーション力」「自己肯定感」からそれぞれ構成されている。

クラスタ1について, A先生は, クラスタ2と3の説明を終えた後に熟考し, 「自分の生き様をつくっていく」と名付けている。

「真面目さが負の要因を生まないためのパートナーが, 素直さなんです。真面目さと素直さがセットでないといけないんです。」「物事を言いなりに取るのではなくて, 新鮮に感じ取れるような感覚?色眼鏡をかけたリとか, 自分の価値観に当てはめてしまうのではなくって新鮮に受け止めようとする, そう

いう素直さですね。」

「素直に受け容れることからスタートする。」

「素直さみたいなものがあることで、諦めない気持ちが奮い立たされるのではないかなと。」

「頑なに諦めない気持ちは持っていると思うけれど、実は、やり遂げるためには、自分をニュートラルな状態に置いていられるからこそ、続けられるんじゃないかと。」

「意固地になると苦しくなりますよね。」

「柔軟な素直な視点を持っていると、柳のように上手にそこを受け容れたり、かわしながら前に進めると思いますから、結果、やり通すと言うことが可能になってくる。」

「ニュートラルにいられると言うことですね、柔軟に対応して、でも、吸収しながら前に進める。乗り越えられるのが柔軟性。」

「体力というか精神力ですね。諦めないでやりきるには、結局、体力も無いと、相当なエネルギーを使うと思うんで。精神力とバランスよく。」

前述したように、真面目に取り組もうとすると、自分を強く持ちすぎてしまう可能性も生じる、それをカバーするのが素直に物事を柔軟に受け止める気持ちで、両者は切っても切り離せないという。A先生は「ニュートラル」という言葉で表現しているが、そこからこの素直さとは、様々な出来事や人の考え方を自分の価値観をもって断じてしまうのではなく、まず吸収し、解釈してみようと試みる心の持ち様と解釈できるだろう。自分の考えだけで進むと行き詰まってしまうこともある。しかし、他の視点からの考えを取り入れることで、諦めずに自分にとって危機的な状況を打破していく事が出来ると考える。

クラスタ2について、A先生は「(プロとして)楽しんで生きる(保育する)」と名付けている。

「いろんなことを素直に受け容れるということが出来たうえで、そういう人って好奇心旺盛だと思うんですね。その、何何したいっていう気持ちが生きる原動力になると思うので。」

「したいって言う好奇心から生まれる気持ちって言うのがさらに視野を広げていくって言うか、逆に、視野が広がれば、したいことも増えるという、その相乗効果。それが楽しむって言う、保育したり、生きるっていう事を楽しむ生き方、それに直結していくと。」

「自分が楽しんで生きるスタイルが何かして事を見つけて下さいって言うのが(この日、学生に話した)事だったんです。」「これがなかったらつぶれます。職場で。」

「この(楽しむ)の反対が、『こなす』なんです。こなす仕事は自分を疲弊させますので、いつか息が上がってつぶれます。だから僕は『楽しむ』だあって。こっちが勝たないと、夢は叶わないだろう。」

好奇心が豊かな人は視野が広く、さらに広がった視野から食欲に吸収しようとする、正のスパイラルを生じることが出来るのだろう。そしてそれは様々なことに素直に反応できる人がそうすることができる、というクラスタ1の説明にも関連している。A先生は仕事に関連したことで、プライベートでも、自分なりに楽しむスタイルを学生のうちに作っておいて欲しいと強く願っている。「(頑なでない)自分らしさ」を失わないためには、どのようにすれば良いかを知っておいて欲しいと強調した。そして、自分が保育のプロとして生きる事を楽しんで欲しいという。視野を広く持ち、夢を持って保育に取り組んで欲しいというA先生の願いなのであろう。

クラスタ3について、A先生は「(人として)生きる土台」と名付けている。

「いろんな人がいて、いろんな気持ちがある、いろんな生き方があってあたりまえって事をまず素直に認められることが、コミュニケーション能力の大前提だと思うんですよ。こうした姿勢がないと、コミュニケーション能力自体が高まらない。」

「人のことを受け容れられる人は、自分のことも受け容れられるだろうと思うんです。自分が受け容れられない人は他人も受け容れられないと思うんです。双方あれば双方成り立つだろうし、片方だとうまく行かない。」

「自己肯定感を持っているつもりでいても、頑なに自分を守っているだけで、受け容れているというよなものじゃないんじゃないかな。変に自分をバリアして、私は私だからこれで良いっていう、マイナ

素的な防御では、人のことなんか受け容れるなんて、絶対しないと思うんで。」

「逆に、自分の良さも悪さも、良いじゃん、こんな生き方だっと思える人は、他の人のこともそう思えるような気がするんです。」

自分自身も含め、まず肯定的に受け止めることが重要であり、それが出来ている人がコミュニケーションを取ることも出来るということである。他者に対しても自分自身に対しても、こうでなくてはいけないという「枠」を設けてから考えたり、理解しようとしたりすることは、潤滑なコミュニケーションを阻害する。ただし、自分自身を肯定的にとらえるといっても、頑なに自分のスタイルがあると思いついで、より良い変容や進歩を求めない人もコミュニケーションを取ることが難しいということだろう。

## (2)B先生について

キーワードは重要度順に

「快活さ」「気持ちよい挨拶」「楽器」「趣味の時間」「良好な家族関係」「体力」「生活力」「相談する姿勢」「屋外での遊び」「エピソード記述」が挙げられた。

B先生も10の項目を挙げているが、上位二つは「快活さ」「気持ちよい挨拶」であり、B先生が、何よりも明るい人間性と常識を持った保育者を求めている事がうかがえる。また、中間のキーワードが「楽器」「趣味の時間」「良好な家族関係」「体力」「生活力」であることから、その人を支える何かをいくつか持っていること、そのような環境があることを大切にしているのだと推察する。なお、どの項目も「+」のイメージであると、身についていて欲しい、という思いが見えてくる。

次にB先生によるクラスタ解釈について記述する。

仮のクラスタの第1は「快活さ」「気持ちよい挨拶」「体力」で構成される。クラスタの第2は「エピソード記述」と「生活力」から、第3クラスタは「趣味の時間」「良好な家族関係」から、第4クラスタは「楽器」「屋外での遊び」からそれぞれ構成されている。

クラスタ1について、B先生は「明朗快活」と名付けている。

「挨拶も快活でないだめだし、人の目を見てでない。…性格と行動を合わせた感じですね、その具体例って感じ(挨拶)。」

「体力がある子っていうか、胆力がある子って、快活というか人付き合いが苦手でないかなって」「フィジカルが強い子はこころもつよって私は思ってます。部活とかやってきている人は強い。」

単なる明るさと言うよりも、こころの強さ、人との関わりが出来る人、それが嫌でない人であれば、と言う思いがあるようだ。

クラスタ2について、B先生は「生活力に裏打ちされた感受性」と名付けている。「エピソード記述」と「生活力」という、一見関連が浅いと思われる内容同士について、以下のように述べている。

「自分で人生を組み立ててく経験が豊富な人は、子どもが何をしているか、何を思っているかっていうのを感じ取る器も大きいと思うんです。」

「人間が大きいって言うよりも、感覚器官がこう、そっちの面で、生活の幅が広い人って、子どもが今やっ

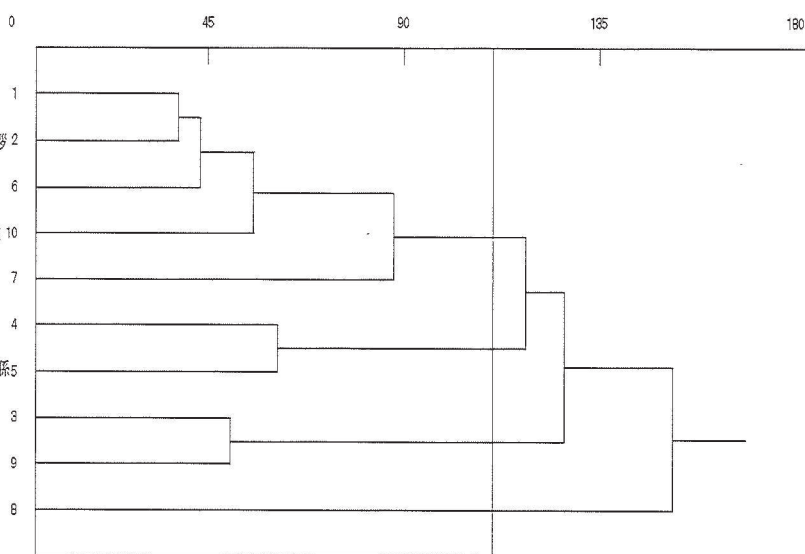


図4 B先生のデンドログラム

てる事を感じてあげたりが…」

「読み取れば、それを記録するのも簡単ですよ」

「自分が感じたり、具体的に触れたり嗅いだり、したことがなければ、子どもがそうやっても、共感も出来ないですよ、共感できれば記述に出来ますよ」

保育者自身の生活上の経験も豊かであることを求めているのであろう。自分自身、心を動かした多彩な経験を持っている人が、子どもが心を動かしている様子を読み取り、理解することが出来る、ということなのだ解釈できる。

クラス3については「安定した自分」と名付けている。

「これは、プライベートが充実しているか、ということですね」

「逆境に家族が緩衝剤になってくれる人と、ダイレクトに一人で抱えちゃう人とは全然違いますね」

「支えてくれる人、時間、仲間、こと、ものでもいいですから、何でも良いからある人は…その時間だけは、なにがあっても帰ります、っていつて帰る子の方が見て安心ですよ」

「ご両親のことで、…(社会人の)苦しんで、そこに共感してくれるかで、全然違いますよ。」

仕事の辛さを一人で抱え込まずに受け止めてくれる人の存在や、自分らしさを失わないための何か打ち込めるもの(事)を持っている人は精神的に安定し、もしくはすぐに安定を取り戻し、保育活動にも余裕を持って取り組むことができる、ということだろう。保育という激務に耐えるには、精神的な安定は不可欠であり、そのための拠り所があるのが望ましいということである。

クラス4は「保育スキルを高める意欲」としている。当初、B先生は「保育スキル」とのみ表現して、「出来ないよりは絶対あった方が幅が広がる」と話していたが、「それを幼稚園に就職する前に知っていなさいと言うよりは、それを楽しもうよ、幼稚園の先生になったら、ということ」という話を経て、「それは就職前にそうなっていて欲しいな」と言い直し、むしろ楽器や遊びを楽しめるような状態で幼稚園に来て欲しい、という表現になっていった。つまり、スキルそのものよりも関心を持って取り組もうと言う気持ちを持って就職してきて欲しい、という思いがあるようだ。それ故にこのクラスタの名称が以上ようになったのだろう。

「相談する姿勢」が別個になったが、各項目と関連が低いのではなく、「何事にしても一人で抱えるなよ、ということです」という話にあるように、むしろ各クラスタに大卒でかかわっているということであるようだ。「あなたが行ったことはあなたの行動ではなく、この幼稚園が行ったことだと理解される。

(と、新人には言う。だから) 良いことも、うまく行かなかったことも何でも報告して欲しいということです。「相談するタイミング、今言うべきだよって教えてあげないと気づかない事が多い。最悪なのは、保護者から言われて気づくことですよ」今の若い保育者は、相談さえ遠慮して黙っていることもあるので、とにかく何でも手遅れになる前に相談、報告して欲しいということである。この一人で抱え込まない、という事柄はB先生の新人育成の中核をなしているとも言えるだろう。この事は養成校でも、学生に対して十分伝えていかなくてはならないだろう。

#### IV 総合考察

##### 1. 先生方の思いから見る新人保育者に期待すること

二人の先生方に共通していることには、以下のようなことが挙げられる。

- ・ 明朗さ、挨拶などの基礎的生活態度が身についている。
- ・ 仕事をする上で自分を見失わないため、自分(らしさ)を支える事柄、人の存在がある。
- ・ どんな人であっても進んでかかわろうとする。自他を柔軟に見る余裕がある。自分の価値観に縛られない。頑なな態度は柔軟性を阻害する。
- ・ 初めから高いスキルは望まない。むしろ保育のスキルを高めることを楽しいと思える、楽しんで仕事に取り組もうとする気持ちがある。

挨拶などの生活習慣やコミュニケーションについては、先行研究においても述べられているが、保育

スキルについてあまり望まないというのは意外であった。しかし、やらなくて良い、ということではなく、あくまでも完成したものを要求されていないだけであり、両先生が話すように、荒削りでも様々なことに好奇心を持って挑戦し、経験をしておくことが重要だと思われる。そして、興味深いのが、自分を支える事や人を持っておくこと、という事柄である。過酷な保育の現場で自分がつぶれないため、「自己を保つ」ため必要なことであろう。この事に関してであるが、「自分をもつ」について、A先生は自己と他者の間でバランスを取ることを、自己や他者を「受け入れる」ことを強調しているのに対し、B先生はぶれない「自分をつくる」という印象があり、若干異なっているように感じ取れるが、両者の考え方は相反しているのではないと思われる。B先生が言うのは、辛いことがあっても生きていく支えとなる、土台となる部分を持って（職に就いて）欲しいということであり、A先生が言うのはそうした土台をきちんと持った上で、人とつきあい、その中で、必要であればその土台も作り替えていけるだけの柔軟さを持って自分を育てていくということだと推察する。

むやみやたらな「自信」ではなく「自己を育てる」には、迎合ではなく「他者を受け入れる」には如何にあるべきか、ということであろう。

## 2. 養成校の役割について

上記のように、保育にかかわる知識やスキルよりも、人間性やその人の生き方や考え方にかかわる事柄が求められているようであるが、このような人間性はその人の生き方が反映するものであり、普段の生活の積み重ねが無ければ身につけていけない。養成校における人間性の育成については、養成校がその意義を理解し、いかに動機づけるかが課題になる。まずは学生自身に自己を見つめ、振り返る機会（自己を知る）を意図的に設けていく事が肝要であろう。長期的・継続的にその機会を設け、自己の人間性と保育者資質のつながりを学生自らが考えられるように指導し、主観的に自己を語ることから俯瞰的に自己を見つめることが出来る力を育てたい。

今回調査した先生方は養成校における知識・スキルの指導について高く位置づけていないが、その趣旨は知識やスキルそのものが目的ではなく、子ども理解や援助に必要な一つのツール（保育の引き出し）に過ぎないということだと理解できる。必要な時に「引き出し」が空では何もできない。引き出しに物を詰め込む指導ではなく、いつ引き出しを空けるのか、出したものをどう使うのか、それはなぜなのか（子どもたちの何につながるのか）を考える指導を行っていききたい。

人との関わり・コミュニケーション力についても、性格も関連することでもあり、一律に育成していくことは困難である。いつも同じメンバーばかりではなく、様々な人とかかわる授業。新しい人間関係を作ることが出来る訓練（指導）を行う事も考えられるが、多様な他者と関わる機会を設けるには、学年で授業を行うことの多い大学では限界もある。また、「多様な人と関わった」と満足し、そこで終わってしまわないようにしなくてはならない。経験を増やすことと同時に、一つの経験から想像力や応用力を働かせる力を育てることを考えていきたい。

また、少人数での指導時間（ゼミナールなど）も活用し、人とかかわる楽しさ、情報を交換する楽しさについて実感させ、さらに自分を支える事柄や人について語れる時間を努めて多く取っていくことも一策であると考えられる。

### 【引用文献】

- 1) 八田哲夫(2010)『教えて！保育者に求められる100の常識』, 中野商店
- 2) 板東真理子, 横山洋子(2012)『U-CANの保育者1年目の教科書』, 自由国民社
- 3) 増田まゆみ(編)(2011)『乳児保育』, 北大路書房
- 4) 内藤哲雄(1997)『PAC分析入門－「個」を科学する新技法への招待－』, ナカニシヤ出版, 1997
- 5) 新館啓一, 松崎学(2001)「教師の自己分析へのPAC分析の適用可能性に関する研究－筆者自身の新任期の自己成長を振り返ることを通して－」, 『山形大学教職・教育実践研究』, Vol.6